

最近我々は、極めて稀な胆嚢原発悪性繊維性組織球腫 (malignant fibrous histiocytoma) の1例を経験したので報告する。我々の検索した限りでは、本症例が本邦第5例目である。症例は74歳女性。食欲不振・体重減少を主訴に入院。CT・超音波検査では、肝右葉前区域の腫瘤とこれに接して結石・壁肥厚を有する胆嚢を認めた。腹部血管造影では、胆嚢動脈の血管増生、肝右葉の腫瘍濃染、門脈および右肝動脈の左方への圧排を認めた。以上より肝への直接浸潤を伴う胆嚢癌と診断し、胆嚢摘出術・肝中央2区域切除術を施行した。組織学的検索にて悪性繊維性組織球腫と診断された。術後経過良好にて33日目に退院した。

15. PTCSにて診断しえたムチン産生性肝内胆管癌の1例

(呉羽総合病院外科)

浅沼 瑞子・関 由紀夫・小坂 博美
(同 内科) 花田 稔

症例は61歳 男性。深呼吸時に増強する上腹部痛を主訴に来院。エコー、CTにて肝左葉に総胆管および左肝内胆管の著明な拡張とそれに連続して内部に多発性の乳頭状増殖部分を伴う手拳大の嚢胞性腫瘤を認めた。EPCPにて十二指腸乳頭開口部より粘液の流出が観察された。確定診断を得る目的にてPTCSを行った。拡張胆管の内部は粘液にて満たされ、乳頭状増殖病変を呈し、左胆管内へ連続していた。生検施行後24Frネラトンチューブを留置し粘液排出の促進を行った。

本症例の報告例は少ないが、PTCSによる腫瘍部分の観察および組織生検は確定診断に極めて有用であった。

16. 肝細胞癌再発と鑑別が困難だった肝血管腫の1例

(聖隷浜松病院外科)

四條 隆幸・町田 浩道・小島幸次朗・
中谷 雄三・神崎 正夫・戸田 央・
鳥羽山滋生・鈴木 啓子・大場 宗徳・
田中 信一・磯垣 淳

(同 病理) 小林 寛

(同 放射線科) 影山 貴一

画像診断が発達してきた現在でも、肝細胞癌と肝血管腫の鑑別は時に困難な場合がある。今回、臨床経過・画像診断上で肝細胞癌術後再発と鑑別が困難だった肝血管腫を経験したので報告する。

症例は56歳、女性。約6年前に肝外進展型(胃・脾

浸潤)肝細胞癌の診断で肝左葉切除および胃脾合併切除術を施行されている。肝硬変の合併はない。平成2年6月肝右葉腫瘍を指摘され入院した。US・CT、Angio。(腫瘍濃染、リピオドール集積)等で肝細胞癌再発と診断。TAE後肝右葉部分切除を行った。摘出腫瘍の組織学的診断は海綿状血管腫であり、肝硬変や悪性所見を認めなかった。

17. 術前短期IVHにおける各種栄養パラメーターの評価とその限界

金 英宇

IVHの栄養学的有効性について異論はないが、外科における術前IVHについての報告は少ない。一方、術前IVHを行なっても栄養状態が改善されない症例を臨床的に経験し、また、術前入院期間は極めて制限されているのが実情である。さらに、入院時に、多くの患者がすでに栄養障害に陥っていることが本邦でも明らかとなってきており、術前に栄養状態を改善することは、必要不可欠であると考える。そこで今回、入院時栄養不良とされた消化器癌患者を対象として、短期間の術前IVH管理を行ない、入院時と手術前日の各栄養パラメーターを測定し、各栄養パラメーターの改善率(術前/入院時)と術後合併症との相関を検討し、負荷試験としての術前IVHの意義について検討した。

18. 大腸癌肝転移例に対する各種治療法の検討

神崎 博

大腸癌肝転移例に対し、当科では積極的に肝切除および切除不能例に対する種々の経カテーテル治療を行なっている。肝切除以外の治療法は効果が様々で、治療法を選択するにあたって効果を予測する指標が必要である。

1987年4月より当科で経験した大腸癌切除例は294例(直腸癌125例、結腸癌169例)あり、そのうち肝転移例は39例であった。今回は肝転移症例でかつそれ以外の非治癒切除因子を認めない34例を対象とした。肝切除群は2生率83.3%と良好であった。経カテーテル治療群における有効群と無効群の違いについて種々の因子を比較した。有意差はなかったが転移巣が大きく、CEA高値の場合治療に抵抗する傾向がみられた。今後ラミネン値、DNA ploidy pattern、エコーなどの画像診断から治療効果予測因子を研究していく所存である。

19. 超音波検査による直腸癌リンパ節転移診断

進藤 廣成

近年、直腸癌の画像診断の進歩によりCT、MRI、経